

農産FAX情報 第2号

令和7年5月30日

ゆとりみらい21推進協議会 指導部会 幕別町忠類地区

1 秋まき小麦

(1) 赤かび病の防除（開花始から1週間間隔で3回）

○止葉期は、平年よりもやや遅れています。出穂がほぼ揃った頃～開花前を確認したら1回目の防除を行いましょう。

○赤かび病は開花時期が最も感染しやすいため、第1回目の防除は「開花始」に実施します（図1参照）。赤かび病胞子は空気中の湿度が高いと飛散しますので、開花時期に降雨がある場合は予防的に降雨直前か降雨直後に防除し感染を防ぎましょう。

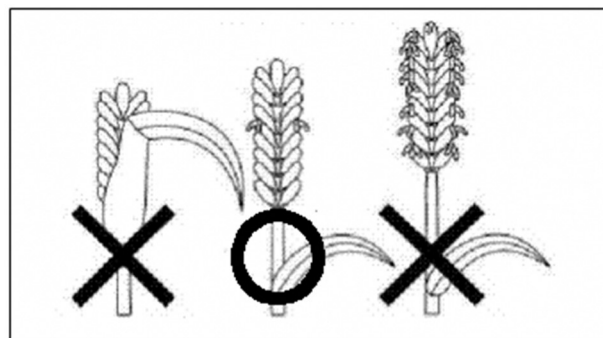


図1 開花始の目安

表1 赤かび病防除を中心とした防除体系例

防除時期	薬剤名	分類 系統	使用濃度(倍)	使用回数	使用時期
1回目防除 (開花始期)	プロラインフロアブル	DMI	2,000	2回以内	21日前
2回目防除 (7日後)	ミラビスフロアブル	SDHI	1,500	2回以内	7日前
3回目防除 (7日後)	バラライカ水和剤	フタルイミド DMI	500	2回以内	14日前

注：耐性菌の出現を避けるため、同一系統薬剤の連用は避け、系統が異なる薬剤を組み合わせましょう。

(2) アブラムシの防除

○出穂以降は、アブラムシ類の防除時期となります。出穂10日後頃に1穂当たり7～11頭寄生する（寄生穂率が45%を超える）場合は減収になるので防除しましょう。（表2）

2 てんさい

(1) 中耕

○中耕作業により、除草効果や地温上昇効果が期待できます。実施時期が遅れると、根や茎葉を傷めるため注意しましょう。

(2) テンサイモグリハナバエ

○一部ほ場で発生が確認されています。被害株率が100%で、食害面積1/4を超える葉が1株に5枚以上ある場合が防除の目安です(表2)。

3 ばれいしょ

(1) ナストビハムシの防除

○成虫は、萌芽期頃に成長点付近を食害し生育を妨げるため、成虫・食害痕を発見しだい薬剤散布を7~10日間隔で2回実施しましょう(表2)。1~2mmの円形の穴が特徴です。

○6月上旬ごろから産卵が始まり、ふ化した幼虫は地中に入りストロンや根、塊茎を食害し甚大な被害となります。成虫を防除し、幼虫の密度を抑えましょう。

表2 殺虫剤使用例

適用害虫〔作物〕	薬剤名	処理濃度(倍)	使用回数
〔秋まき小麦〕 アブラムシ	スミチオン乳剤	1,000	1回
	ウララDF	4,000	2回
〔てんさい〕 テンサイ モグリハナバエ	トクチオン乳剤	1,000	2回
	ダントツ水溶剤	4,000	3回
〔ばれいしょ〕 ナストビハムシ	アクタラ顆粒水溶剤	2,000	3回
	モスピランSL液剤	4,000	3回

4 豆類

○除草剤について、パワーガイザー液剤(出芽直前~1葉期)を使用する際は、有機リン系殺虫剤・イネ科除草剤を使用する場合は、10日以上あけて散布するよう注意が必要です。

防除から帰ったら生産履歴への記帳を！

農業機械の操作はあせらず、安全確認を！

徐々に暑くなる季節、日陰でこまめな休憩を！